

～新時代を生きる子供たちとその保護者の皆さまへ～

「ひとり一人の輝く明日に」

第1章「社会の変化と教育の要請」



▼ グローバル化と格差社会

今の日本が抱える最大の問題と問われれば、誰もが「少子高齢化」と「人口減少」と答えると思います。2006年を境に我が国日本は人口減少と共に市場規模が縮小する事態を迎えている訳です。そうした中で一つの解決策として声高に言われているのが「グローバル化」という潮流。日本の市場ルールを国際ルール（特にアメリカのルール）に合わせて打開を図ろうとする考えであり、市場開放・規制緩和はその流れの一環として現在まで続けられているのです。

▼ 収入格差が16倍の社会



さて、アメリカのルールとは？であるが、それは「2対8の法則社会」（パレートの法則社会）という一語に尽きるのである。2割の国民が国の総資産の8割を独占する社会という事。より分かり易く言えば「格差社会」というものであり、既に社会問題化して久しいのは周知の事である。では、「格差社会」の正体とは具体的にどの様なことであろうか。

先に答えを言ってしまう。上位2割と残り8割との間の格差が何と16倍もあるという事。これが格差社会の正体なのである。人口が100人の国があったとする。その国の総資産が100万円だとすると、上位2割の20人が80万円を所有するので1人平均の資産が4万円。一方で、残りの80人が残りの20万円を分け合うのでこちらは1人平均2500円。確かに16倍の格差が生まれているのである。

格差 社会



総中流社会と「七五三教育」



かつての日本はどうだったか。「護送船団方式」と呼ばれていたように国民の90%が「中流」と意識する社会が高度経済成長の流れの中で定着しており、「落ちこぼれ」の底辺10%にさえ入らなければ、そこそこの生活と幸せが保証されていたのである。教育に対する要請も社会の変化と共に変わってきている。

総中流社会では「落ちこぼれ」を作らない事が至上命題だったので、学校教育は「画一的」で「没個性化教育」を推進したのも十分うなずけるものであり、社会の要請そのものであった訳である。同時の保護者の子供に対する希望は「せめて平均点は取ってほしい。」だ。平均点さえ取っておけば落ちこぼれる心配はなかったのである。

当時、「七五三教育」と呼ばれ、高校生の7割、中学生の5割、小学生の3割が学校の授業についていけない「教育崩壊」状態だったのである。



目標はアメリカだった日本



そんな中、1980年代初頭に大きな社会構造の転換期を迎えたのである。日本が経済大国としての地位を確保した頃である。「アメリカに追いつけ、追い越せ」を国民の目標として邁進し、アメリカを大きなお手本としてきた。無駄なくそこに到達する為の方程式を解く能力、所謂、処理能力の向上が必要とされてきたのである。日本の官僚組織はそういう面では極めて優秀だった。

所が、あれよという間に日本はアメリカに追いついて経済発展を遂げたまでは良かった。が、一方で大きな目標を見失った日本（というより日本の官僚組織と機構）はリーダーシップを取れぬままグローバル化に向けた教育システムの改革や人材作りに大きく後れをとってしまったのである。早くその舵取りができるリーダーが方向性を示すべきだったが、そういうリーダーを養成し輩出するシステムそのものが足りなかったという事である。



～新時代を生きる子供たちとその保護者の皆さまへ～

「ひとり一人の輝く明日に」

第2章 「公教育の迷走と失政」



「ゆとり教育」とは何だったのか



所が公教育の現場では時代の要請に全く逆行する、所謂、「ゆとり教育」という施策が実施されたのである。1970年代の半分の学習内容（公立学校の主要科目）でしかなく、当然、授業時間数は先進諸国の中で最低ランクという事になってしまった。校内暴力、いじめ、自殺・・・何か問題が起こる度に「偏差値教育」「詰め込み教育」が批判され、学習内容が次々と削減されてきたのである。

それが失敗だった事は明白であり、子供たちの学力が低下の一途を辿っている事は各方面の調査機関によっても指摘されている通りである。しかも、それによって改善される筈だった「教育環境」は改善されるどころか徐々に悪化しており、相変わらず続く「不登校」「いじめ」問題に加えて「学級崩壊」と「モンスターペアレント」の出現、更に教師の「精神疾患」の増加が顕著になってきている。それらには様々な原因が挙げられるが、ここでは子供の変化と教師の変化に分けて原因を考えてみたい。



「労働」の対価としてのお小遣い

内田樹氏の著作「下流志向」を御存知だろうか。副題は～学ばない子どもたち、働かない若者たち～。昭和30年代の子供は社会との関わりを「労働」から始めた。誰もがそうだった。家のお手伝いをし、おつかいにも行き、母親から感謝され、父親から褒められ、時にはお小遣いを貰う事で労働の喜びや尊さを学び、社会の仕組みを極く自然に学んでいたものである。





「ビジネス」から始まる今の子供たち

一方、日本が豊かになると子供たちは「労働」をしなくても「お金」をにできるようになったのである。物心ついた時には自分名義の通帳があり、小学校入学前には既に数十万円の貯金を持っている子も珍しくなく、又、小さい頃から「お小遣い」を貰うのを当然の権利として育ててきている。つまり彼らは社会との関わりを「消費」から始める事になるのである。



昔の子供たちが「ボランティア」から社会生活を始めたのに対して今の子供たちは「ビジネス」から始めているのである。従って、自然と「費用対効果」を学ぶ事になるわけで、買ったジュースが不味ければ二度と同じ商品を買う事はない。取引停止となるのだ。

学校授業という「商品」



同じことが学校現場でも起こっている。「授業崩壊」である。多くの子供たちにとっては1時間近くをじっと真面目に授業を受けるのは「苦痛」以外の何物でもないのである。彼らは「苦痛」という対価を払っていると感じており、それに見合うだけの「商品」が提供されない場合「取引停止」となるのである。最悪の場合は「不登校」とさえなってしまう。ボランティアから学んでいた昔の子供が見返りもなく苦痛を払う事を当たり前と捉えていた時代とは大違いとなってしまったのである。

かつて世界最高と評された日本の教育制度

教師側の変化としては、教育の現場からリーダーシップが消滅した事が大きい。教育の現場でのリーダーシップとは「子供たちの（広い意味での）学習意欲を向上させる力」の事であり、それは「権威」という言葉に言い換えても良いであろう。かつての教師という仕事は「聖職」と呼ばれ、子供は勿論の事、保護者もその権威を尊重し、教師自身もその権威に相応しい自制心と向上心を備えていたのである。そうしたバランスの上に世界最高と評される日本の教育制度が成立していたのである。所が1980年代以降に「子供の人権」という美辞麗句の下、教師自らが子供たちと同じレベルまで降りてきてしまい、上から引っ張り上げる（リーダーシップ）という苦役を放棄してしまったのである。





「お友達先生」と「悪平等主義」

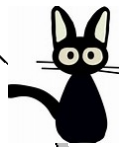


その結果どうだろう。今では「お友達先生」が全国の学校に氾濫し、学校現場では長く「競争の否定」が続いてしまい、悪平等主義とも言うべき指導が行われてきた。教師と生徒の関係性においても「師弟関係」という構造を崩壊させてしまい、教育現場でのリーダーシップを発動するエネルギーさえも消失させる事となってしまったのである。こうして組織崩壊から学級崩壊へとになってしまうのは防ぎようもなく、モンスターペアレントを生み出す原因もここにあると言えるのである。

教師が子供たちのレベルにまで降りてきてしまった以上、保護者から無理難題・クレームが大挙して押し寄せてくるのも当然であろう。社会の変化、子供たちの変化に逆行する方向へ公教育が変節してきた事こそが日本の教育が内蔵する深刻且つ最大の問題点なのである。



猫の経済効果 ネコノミクスは 2兆3162億円！



今や空前の猫ブーム。年間の経済効果は2020年の東京オリンピックの経済効果よりも大きいと侮れないムーブメントと言えるようです。この経済規模は2大テーマパークのTDL&SeaとUSJの年間売上合計1.5兆円を上回ってるんですね。因みに「ラーメン」の市場規模が全国に2万店余りで6000億円だそうです。

更に、ペットの数では犬の数を追い抜く勢い。キャット・フード、猫砂、消臭スプレーなどの日用品から病気になった時の診療費・ペット保険など何（ニャン！）と猫1匹にかかる年間費用は約11万円。観光の目玉として「猫島」が世界中（ネットの力も凄いです）からお客さんを集めているようです。

人気ベスト3は①スコティッシュフォールド②アメリカンショートヘア③アビシニアンのようです。

諸説ありますが・・・。



～新時代を生きる子供たちとその保護者の皆さまへ～

「ひとり一人の輝く明日に」

第3章 「無責任な社会の教育認識」



「この世には勉強よりも大切な事がある？」

「夏休みくらい勉強を忘れて伸び伸び過ごせばいいじゃないか！」と、したり顔で無責任な立場の大人達からしばしば聞かれるセリフである。所謂、教育評論家やワイドショーのコメンテーターは言うのである。



「この世の中には勉強よりも大切なことがある」と。そして「友達と友情を育む事」、「自然と触れ合う事」を代わりに挙げたりしてくる。そして多くの方は「その通りだ。」「確かにそう思う。」と思ってしまう。

友情



しかし、ちょっと待ってほしい。「勉強」「友情」「自然」・・・これらを同じ土俵、価値観で優先順位を付けるべきものなのであろうか。子供たちにとってはどれも大切なものであり、そもそも優先順位など付けるべきものではない。「友情」や「自然」の大切さが「夏休みに勉強をしない方がいい」という理由にはならないのは明らかである。

命の尊さと日常の中に「死」と共存する

具体性のない美辞麗句、例えば学校現場でしばしば聞かれる「命の尊さを教える教育」「人権の大切さを教える教育」等の台詞。こうした美辞麗句に反論の余地はあろう筈もない。当たり前の事なのであるから。教育現場で必要なのは実行可能な具体論である。「命の尊さを教える為に、カエルの解剖を復活させよう。」という意見である。



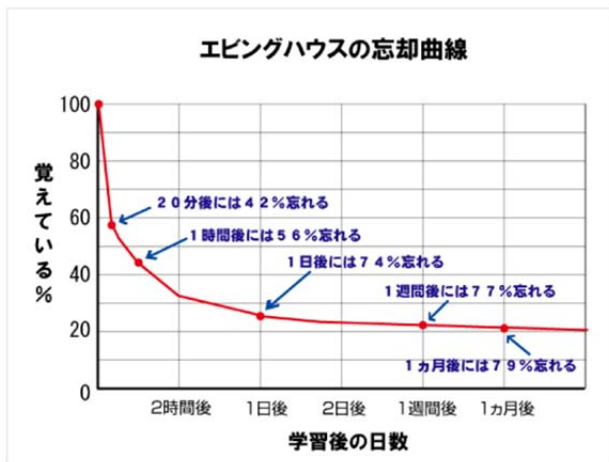
我々が幼い頃、魚は生きたまま魚屋から台所に運ばれて母親の手でまな板の上で捌かれ、祖父母の最期を自宅で看取ることも普通にあった。こうした日常の中で「死」が日常に

共存し、「死」と向き合うことで「命の尊さ」を学んだのである。「いじめ問題」が学校現場で議論されても何も前進が見えないのも、美辞麗句ばかりが先行している事がそれを証明している。先に示した「夏休みくらい・・・」という美辞麗句は耳障りが良く、万人受けするかもしれないが、何の前進も、子供たちの成長にも貢献しない主張であると言わざるを得ない。賢明な保護者はこうした美辞麗句には惑わされてはいけないのである。



噺家（落語家）さんは一体どれ位の噺を暗記してるのか。どうやってあれだけ長い噺を暗記しているのか。とても興味がありますね。持ちネタの数も100本以上あるようですから、並外れた記憶力を生まれつき持っているのか、或いは、秘密の暗記法でもあるのか・・・。皆さんは昨日の食事が何だったか思い出せますか？比較するレベルが違い過ぎますが噺家のタイプは次の4タイプあるようです。①すぐ覚え、なかなか忘れない人。②すぐ覚え、すぐ忘れる人。③なかなか覚えられないが、いったん覚えるど忘れない人。④なかなか覚えられず、すぐ忘れる人。

エビングハウスの忘却曲線とは・・・



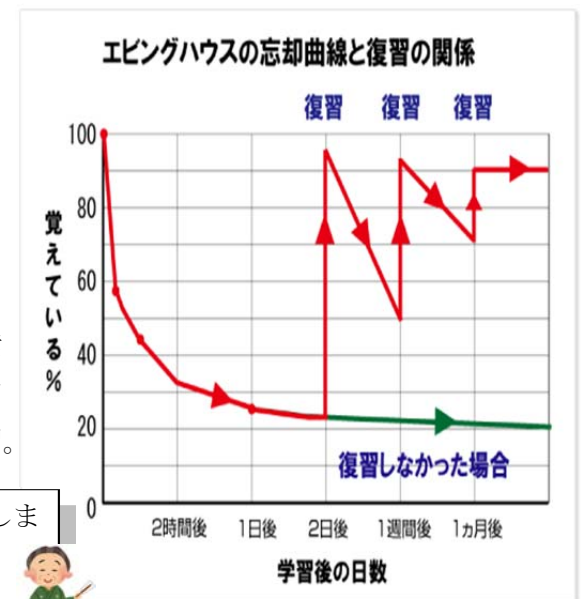
復習しないと
1日で74%
1週間で77%
1ヶ月で79%
忘れます



ドイツの著名な心理学者：ヘルマン・エビングハウス

そんな中で立川談笑師匠は超最速で演目50席を暗記（立川流の二つ目昇進試験）した秘密の方法が忘却曲線を上手に取り入れた独自の暗記法にあったようです。今では弟子に記憶攻略法を指導もするらしいです。

詳しくはYouTube（立川談笑 大量記憶術）で検索してみてください。復習計画を右図の通りに実行して記憶攻略した動画が見れます。ポイントは3回復習。



夏休みの1ヶ月後に学業の差が大きく出る事はよく耳にします。理由はこうだったんですね。お後がよろしいようで。





第4章

「成長とは生きる力を身に付けていく過程のこと」

イチローにはイチローの「社会に貢献する力」

人には確かに「生きる力」が必要であり、それを身に付けていく過程が「成長」である事には異論はないであろう。人が世の中で生きていく為に、各々が身に付けた「社会に秀でた能力」を具体的な姿で提示する事、これが「生きる力」そのものであり「社会に貢献する力」なのである。医者は我々が持っていない「病気を治す能力」で社会貢献をしているし、イチローは我々にはもっていない「野球の能力」によって社会貢献しているのだ。

どんな分野でも良いのであるが、一般の人が持っていない力で社会貢献する事が「生きる力」であり、それを習得する過程が「成長」なのです。子供たちは「その生きる力」を身に付ける成長過程にある訳であり、その習得手段の代表が「勉強」なのである。

大人と子供の時間軸の違いを忘れてはいけない

同じ一年でも40歳の人の一年は人生の四十分の一だが、6歳の子供には六分の一の重みをもっている。従って、子供たちにとっての40日間は我々大人の40日間とは比較にならない重みを有しているのである。無駄に過ごせば「あっ」と言う間かもしれないが、何かを成すには十分な時間なのであるから、この時間の過ごし方が子供の人生を大きく左右することを全ての大人は自覚しなければならないのです。気楽に「勉強なんか・・・」と言う事は許されないのである。

「ゆとり教育」で土曜休日が無駄に「寝てる」時間に



例えば夏休みの40日間を子供たちにどの様に過ごして欲しいかと言われれば、それは「忙しい日々」を過ごしてほしいと思わざるを得ません。ゆとり教育で土曜日が完全休日になった時のアンケート調査結果で土曜の午前中に何をしているかという問いに対して、最も多かった回答は「寝ている」だった。やる事もなく「寝ている」というのが「ゆとり教育」の結果だったのか。

これでは文科省が訴える「生きる力」所の話ではない。こんな空虚な時間を子供たちには過ごしてほしい。やりたい事、やるべき事が山ほどあり、とても40日では足りないという位の夏休みにしてほしいと思うのである。それでこそ、充実した時間を過ごしたと言えるのではないだろうか。そうした日々が子供たちを成長させるのだ。

第5章

「大人に求められる「ゆずり葉」の覚悟」

「愛情ある強制力」を大人たちは分かっているだろうか

前述したように勉強は子供たちが成長する為に必要不可欠な習得手段である。学生時代にこれを放棄する事は絶対に避けなければならない。何故なら、それは成長を放棄する事に等しいから。勉強は辛くつまらない作業かも知れないが、スポーツでも芸術でも同じで能力の向上にはある程度の負荷をかける事が不可欠。辛い事から逃げたくなるのは人の常だが、そこに我々大人の役割として道を示し、励まし、支える事が必要となるのです。最近の大人は子供たちの機嫌を損ねる事を恐れて腫れ物に触るように扱う事がよくあるが、これで本当に子供たちの成長になるとはとても思えないのである。

人生が変わる瞬間と私塾の現場



今、多くの大人たちに求められているのは、この「覚悟」なのである。私達「私塾人」は例外なく同じ覚悟で授業に向かっているのです。塾・予備校の存在意義は、このような崇高な覚悟に支えられているのである。だからこそ多くの子供たちの「人生が変わる瞬間」が私塾の現場に訪れる。子供たちには数多くの「人生を変える瞬間」に遭遇してほしいのです。その瞬間が「成長」の瞬間であり、生きる力の尻尾を握りしめる瞬間なのです。それは決してテレビやゲーム、漫画の世界には存在しない。ましてや惰眠の中には・・・

人生初めての100点満点を取った生徒のその後の人生は

人生が変わる瞬間の一例をここで挙げてみよう。少年Aは中学1年の1学期の期末テストで英語で84点を取ってきました。少年Aにとってみると他教科より20点高い点数であり、本人も保護者も満足していた。しかし私は、逆に危機感を感じ取り、渋る本人と保護者を説得して夏期講習を受講してもらう事がありました。

英語を徹底的に訓練したのです。結果、休み明けのテストで100点満点と取ってきたのです。小学校から通算して初めての100点満点。その事が自信となって、その後、英語は常にトップレベルをキープし続け、今では高校の英語教師を目指して最難関私大の英文科に進んだのです。少年Aの人生は中1の夏に確実に変わったのです。人生が変わる瞬間はドラマのようにドラスティックな事ではなく、ありふれた日常の中に潜んでいるのです。





「ゆずり葉」・・・河井醉茗

子供たちよ。
これはゆずり葉の木です。
このゆずり葉は
新しい葉が出来ると
入り代わってふるいはが落ちてしまうのです。
こんなに厚い葉
こんなに大きい葉でも
新しい葉が出来ると無造作に落ちる
新しい葉にいのちをゆずって。



子供たちよ
お前達は何をほしがらないでも
すべてのものがお前達にゆずられるのです。
太陽のめぐるかぎり
ゆずられるものは絶えません。

かがやける大都会も
そっくりお前達がゆずり受けるのです。
読みきれないほどの書物も
みんなお前達の手を受け取るのです。
幸福なる子供たちよ
お前達の手はまだ小さいけれど。

世のお父さん、お母さんたちは
何一つ持ってゆかない。
みんなお前たちにゆずってゆくために
いのちあるもの、よいもの、美しいものを、
一生懸命に造っています。

今、お前たちは気が付かないけれど
ひとりでのいのちは延びる。
鳥のようにうたい、花のように笑っている間に
気が付いてきます。

そしたら子供たちよ。
もう一度ゆずり葉の木の下に立って
ゆずり葉を見るときが来るでしょう。

ゆずり葉は枝先で若葉が充分育つと、まるで席を譲るかのように一斉に古い葉が落ちるところから世代を譲るという意味でゆずり葉の名がつけました。

縁起が良いとしてお正月の飾りに用いられます。

初夏、うす黄色の花が咲き、夏に実がなり、実はしだいに黒くなります。別名「親子草（おやこぐさ）」とも言います。



河井醉茗『花鎮抄』より

第6章

「競い合うのは「悪」ですか？」



人類・社会の進歩の為には健全な競争が不可欠

現在の学校現場では奇妙な「平等感」が幅を利かせて子供たちの活力や意欲を減退させていると思える事が多くあります。公教育の場では生徒に順位をつけてはいけないようだ。小学校の運動会では同じ走力の子供同士で組を作って走らせる。大きな差が見えないようにする為の配慮だそうだ。

学芸会の劇でもクラス全員に平等にセリフが割り当てられる。卒業式の答辞は卒業生全員で行うのが主流。中学校ではかつては普通に行われていた成績上位者の発表は姿を消し、順位すら公表しない所さえあるのである。

競うという事が無くなってしまったのである。競うのは人間の本能の一つである。勿論、本能のまま生きていては社会の秩序は維持できないのでそれを理性で抑える事が必要となってきます。それを教え、身に付けさせるのが「教育」の役割なのであるが。今の学校ではその役割を放棄してしまい、競う事を否定する事で無気力で努力しない人間を作っているとしか思えないのです。

クラス対抗リレーの選手に選ばれて嬉しかったこと

子供の多かった時代には生活の中に競争が溢れていた。子供たちは遊びを通して、或いは家庭の中で自然と競争意識を育てた。少子化の現在ではそういかず、「一人遊び」が主流となっており、しかも何度でもリセット可能な「ゲーム」が中心。自然と忍耐力が失せてしまい、対人関係が苦手、すぐに人を傷つけ、すぐに傷つき、ひ弱な人間が多くなってきている。もっと「健全な闘争の場」で生き生きと堂々と競い合い、勝者を称えて敗者の健闘にも惜しめない拍手をする環境が子供の人格を向上させていくものと思うのです。

どうも今の公教育の場では「事なかれ主義」が蔓延して何処からもクレームが来ないことを至上命題とした運営がなされているのであろうと思います。小学生の頃、暗くなるまでバトンパスの練習を校庭で行った事、スタート前の緊張感、優勝して感激した事、転んで悔し涙を流した事・・・あなたにもそんな経験があるのではないかと思います。それを大切な財産として懐かしく思い出すことが何と多い事か・・・。



第7章

「素質の呪縛に振り回されてはいけない」



100分の1秒の裏に見えること

学問における「健全な競争」の為に避けて通れないテーマがある。大人は誰しものが分かっている口には出せずにいる真理。それは「素質」の存在だ。スポーツの世界で言えば、「日本人はウサイン・ボルトにはなれない」という事である。足が速いとか、遅いとかがあるように、数学が得意・不得意という素質の差は厳然としてあります。問題なのはこれを誤魔化して隠したりする事。こんな事をしていたら先に述べた「運動会の駆けっこ」と同じではないか。

さて重要なのはここから。「素質がないから勉強するのは無駄」なのかどうかだ。世界中の人々を感動させたボルトは並外れた素質があった事は間違いないだろう。では、我々は彼の素質に対して感動し、拍手を送ったのだろうかと問いたいのである。100分の1秒を縮める為に彼が行ってきた血の滲むような激しい厳しい鍛錬する姿をその走りの中に感じ取る事ができるからこそ「感動」し拍手したのだと思うのである。

「どうせ俺の子だからこんなものだろう」の決め付け

もし、素質だけで殆ど練習らしき事もしないでいとも簡単に世界記録を連発するボルトだったら我々はその事をどう思うだろうか。「感心」する事はあっても「感動」はまずしない。プロ野球よりも高校野球に感動する事があるのとよく似ていると思う。高校野球にはその裏に何かが見えるから感動するのであって、感心するのではないのである。

学問においても同じだと思う。80点の素質の子供が90点を目指す、50点の素質の生徒が60点を目指す。どちらも10点分の努力をする事に価値があり、その努力が感動を生み、人を動かすのだ。だから私は「90点取れるから勉強しなくてもよい」という考えは完全に否定するのです。同じく「どうせ50点しか取れないから頑張るのは無駄だ」も否定する。

本当の競争相手は自分自身なのである。子供の素質がどれ程なのか分からないにも関わらず「どうせ俺の子だからこんなものだろう」という親の決め付けで、どれ程の子供たちの伸びる芽を摘んできた事か。「健全な競争社会」とはこの事を気付かせる為にも重要なのだ。



第8章

「ブレイク・ポイントを経験して子供は成長する」

我慢の限界の不思議「沸点の法則」

最近、こんな事があった。とある駅での出来事。乗っていた電車が信号機の故障で臨時停車してしまったのである。アナウンスは「修理が済み次第発車しますので、しばらくお待ち下さい」を繰り返すばかり。次第に乗客は苛立ち始めて殺伐とした車内の雰囲気になっていった。結局は60分程で再発車したのだが、いつまで待たされるのか分からない、予想できない事には人の感情は沸騰するのである。一方、ディズニーランドの長蛇の列。「ここから〇〇分」という表示があるが実に見事に正確なのです。90分待った所で「沸騰」する事はないのです。これを「沸点の法則」と呼ぶ。

いつ来るのか分からないのがブレイク・ポイント

この法則は人の成長に当てはまるのです。努力の量と成果は比例グラフのように連動しないのは誰もが経験済みの通りです。スポーツや趣味の世界でも、やってもやっても、頑張っても頑張っても記録が伸びない、成果が出ないという苦難の時期を過ごしたある日、突然、今までの成果が出始める、こんな事がなかったらどうか。勉強では同じ事があります。

突然、成長が顕在化する瞬間を「ブレイク・ポイント」と言います。厄介なのは、このブレイク・ポイントは誰にでも訪れるのだが、それがいつなのかは誰にも分からないという事。残念ながら、いつブレイク・ポイントがやってくるか待てずに諦めてしまうのです。そして諦めた人には永遠にブレイク・ポイントを迎える事はなくなってしまいます。「継続は力なり」の本当の意味はここにある事を知ってもらいたい。



大ヒット映画「三丁目の夕日」を御存知だろうか。昭和30年代の下町庶民の人情味に溢れる、未だ日本が「発展途上国」だった頃の物語。丁度、私が小学生だった頃の時代。今では考えられないこんな時代だった。ほんの一例がこれ。

でも不便と全く思っていなかった当時は不思議な世界か？

- ・携帯電話などない：駅の「伝言板」で連絡しあう
- ・コピー機などない：謄写（ガリ）版刷りのインクの匂いの印刷物
- ・巨人・大鵬・卵焼き：最も庶民に人気のあったもの
- ・街角の風呂屋：親子揃って風呂屋通いと裸と裸の近所付き合い



第9章

「夢は破れる、しかし・・・」



いつ現れるのか「ブレイク・スルー」

挫折禁止

我々大人は「夢は諦めなければ必ず叶う」と言うが、一方で、それが嘘である事も十分知っているのも我々大人たちである。しかし、それでも「夢は叶う」と言い続けなければならないのである。何故なら、そうしなければ「ブレイク・スルー」は訪れないからなのである。挫折の連続を乗り越え、最後まで諦めなかった人にだけ僥倖が待っている。限界まで行った者だけが次の世界の入り口を発見し、通り抜ける事ができる。これがブレイク・スルーだ。

子供たちには小さなブレイク・ポイントを経験させ、突破させる環境を提供する義務が我々大人たちに求められているのである。それを「どうせ俺の子だから・・・」と勝手にその機会を奪うとしたら子供にとっては本当に不幸としか言いようがない。

合格した学校名で人生が左右されるのか



さて、今の公教育に「子供たちにブレイク・ポイントを迎えさせる環境」が整っているのだろうかと問えば、残念ながら甚だ心許ない。一方で、それを公教育現場の教師達に多くを望むのは酷というものである。公教育のシステムそのものが内包する機構としての限界と理解すべきである。ならばその不備を嘆くよりもその足りない部分を家庭が如何に補完するかを考える事の方が建設的ではないかと思うのである。

ブレイク・ポイントを迎えるまでは子供たちには苦しい日々ですぐに挫けて諦めようとする事があるが、その時、子供たちを支えて励まし寄り添って歩んでくれる大人の存在は絶対に必要である。誤解を恐れずに断言するが、合格した学校名で人生が左右される事はない。しかし、そこを目指して本気で取り組んだかどうかで人生は大きく変わる。

受験は辛く苦しい日々を挫けず、諦めずに歩んだ子供は、不合格の時ですらブレイク・スルーを迎える事ができるのである。ブレイク・スルーは挫折と共にやってくるのである。

第 10 章

「自己責任症候群に冒されるな」

「何故、勉強しなければならないの」という素朴な疑問

子供たちの素朴な質問である。多くの大人が「あなたのためよ」と答え、「あなたの将来のため」「あなたが将来、豊かで幸せに生きるため」と語られる。こう聞かされた子供はたちはどう思うだろうか。

自分が別段幸せになりたいとは思わないから勉強しなくてもいいんだ、と考える。「君は幸せな人生を送りたいと思わないのか」と問えば「別に・・・」と言う。自分がそう思ってるんだから俺の勝手だろう、と働くことを放棄する若者が大量発生するのだ。ニート、フリーターが増殖した根源的な原因がこれなのである。

そもそも「幸せに生きること」とは目的ではなく、権利であるべきなのである。人としてだれでもが有している権利。それが「幸せに生きること」なのである。ただ、権利を享受する為には「義務」も果たさなければならない。陳腐な表現だが「世のため、人のために生きること」である。



「東ロボくん」が偏差値 57 で東大受験を諦めた理由

2011 年から国立情報学研究所が開発を進めてきた人口知能「東ロボくん」。センター試験模試で偏差値 57.1 をマークしたものの、東大受験突破は無理と判断してプロジェクトは一旦凍結される事になったとのニュースがありました。更に点数を伸ばして合格レベルに達するには文脈や複雑な文章の意味を理解する必要があるとの事。AI（人工知能）の弱点は概ね通り。

- ・「英語も国語も文脈理解が苦手で小学生にも劣る常識的な選択」
- ・「計算能力は抜群ながらも問題文を計算式にするのに一苦労」
- ・「論述問題で問題文の解釈可能性について行けず、又、暗記力が発揮できなかった」



文の意味を考え、複数の文同士の関係を考える、文脈を捉える、言い換えや抽象的な言い方を具体的な言い方に捉え直す作業は、今の所、人間の方が得意分野であると実証。



囲碁の電王戦で趙治勲名誉名人が囲碁 AI を相手に初のハンデなしの対局で 2 勝 1 敗で国産ソフト「Deep Zen Go」を破ったというニュース。

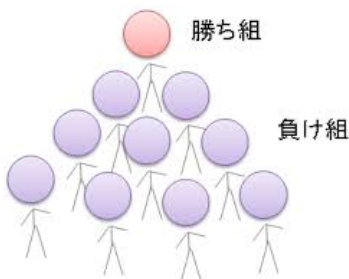
第 11 章

「幸組（さちぐみ）を目指す子供たちに」

ビル・ゲイツ



世の中の 99% の人は「負け組」の現実



現代社会は二極化に流れている。「勝ち組」と「負け組」の言い方が定着しているのです。だが、少し考え欲しいのは、もし日本を代表する大企業が勝ち組だとするならば、世の中の 99% の企業は負け組である。かつて、ジェイコム株のご発注で数分間で 20 数億円の利益を手にしたデイトレーダー氏のように若くして数

百億円の資産を得た者が勝ち組ならば、やはり 99% の人は負け組なのである。異論はあると思うがあのホリエモン氏もまさしく勝ち組なのである。つまり、我々自身をどちらかに分類すれば大体は「負け組」に入るのである。悲しい現実なのである。

「勝ち組」にはなれないかも知れないが「幸組」になれる

しかしだ。或る日、あのデイトレーダー氏の一日に密着したドキュメントを見て感じた事がある。その日の仕事（作業？）を終えた彼がカメラに向かって、「今日は 4 億 5 千万円の利益がありました」と言って番組は終了したのだが、私にはドウ見ても彼が少しも幸せには見えなかったのである。至極憂鬱に過ごしているようにしか感じられなかったのです。当たり前である。彼は、世のため人のために生きていないのだから。彼よりも私の方が、毎日子供たちと必死で格闘している教師たちの方が幸せに生きてると自信をもって断言できる。

我々は「勝ち組」にはなれないが、「幸組」にはなれる。「勝ち組」に対する「負け組」ではなく。子供たちには「数百億の資産は持てないけれど、こんな幸せな生き方があるんだ」と、言葉ではなく行動で伝えたいと思っています。人は動物と違って環境動物。生まれたばかりの赤ちゃんには善人も悪人もないが、周りの環境によって善と悪が作られていくのです。より良い環境を子供たちに提供する事、これこそが我々大人の責務である。我々大人の存在そのものも子供たちにとっては周辺環境の一つである事を忘れてはいけない。

幸組 > 勝ち組

第 12 章

「そしていつか、君は日本のリーダーになる」

野球をするなら甲子園を目指せ！何故ならば・・・

一つだけ伝えたいことがある。同じ野球をするなら甲子園を目指せ！草野球ではなく。甲子園の野球を見た事があると思う。彼ら高校球児達は、勝っても負けても泣いている。それだけ真剣に野球に取り組んできたからなのである。辛い練習に耐え、ボールをひたすら追いかけた3年間で彼らに涙させるのです。

但し、残酷だが優勝できるのはたったの1チームだけ。では、その他大勢の敗者が費やした3年間の努力は無駄だったのだろうか。絶対に違う。断じて違うのである。草野球はレクリエーションとしては楽しいので全面的に否定はしないが、そこからは生きる力は得られない。

勉強は辛い訓練の一つ。しかし、だからこそ成長し、生きる力を宿すことが出来るのです。限界まで挑戦をして欲しい。きっとその先にある新たな世界へと足を踏み入れる事ができるのです。その覚悟があなたの人生を変えていく。そしていつの日か、君は日本のリーダーになる 今こそ、生きる力の尻尾を掴んで欲しいのです。

「だから勉強を続けなければならないである」

英才個別学院 長後駅前校・桜が丘校

>長後駅前校

〒252-0807 神奈川県藤沢市下土棚 465-2 カナメビル 2F
TEL 0466-43-8833 メール chogo@eisai.org

>桜ヶ丘校

〒242-0014 神奈川県大和市上和田 979-1 シルバーコーポ 桜ヶ丘 3F
TEL 046-279-6677 メール sakuragaoka@eisai.org



***** 塾代表（教室主宰：宮入直登）からのメッセージ *****

子供に対して「幸せな人生」を送ってほしいと全ての親は思っています。しかし、本当の「幸せ」とは何ですか。大金を手にして「勝ち組」の豪華な生活を送る事ですか？辛い大変な勉強を通じて人の為に生きる道を見つける事、これこそが「幸せ」ではないかと考えるのです。子供たちには「幸（さち）組」を目指してほしいと、真剣に塾業を天職として日本の未来と子供たちの将来を夢見て日々働き続けています。